

高売布神社の神様と社号石（酒井）

下照姫と天雅彦

高平の里は、水は清くて、豊かな自然に恵まれた、とてもよい里です。

天照大神が天つ国から見下ろされるたびに、

「美しい里よ。」

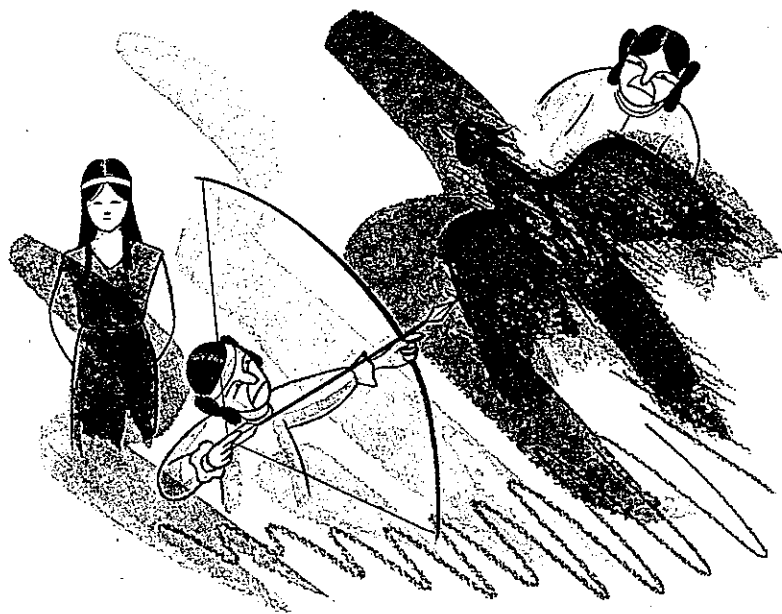
とつぶやかれます。御子の高皇産霊神は、大国主命にこの里を天つ国に譲るように命じるため、天雅彦命を使いに出しました。

ところが、高平の里におりたつた天雅彦命は、その里の下照姫に心を奪われ、役目のことをすっかり忘れてしまいました。

そして、下照姫と夫婦になり八年が過ぎたころ……。

高皇産霊神の使いらしき雉鳥が現れましたが、天雅彦は雉鳥に矢を放ち、雉鳥の胸を貫いた矢は天つ国まで飛んでいきました。

天つ国に届いた矢を見た高皇産霊神は、天雅彦のものだと見抜き、「大国主を射つた矢なら天雅彦に当たるな。邪



心があるなら当たれ」と念じて、矢をつき返しました。

「ぎゃっ」

天つ国から放たれた矢は、寝ている天雅彦の胸に当たりました。それをみた下照姫の悲鳴が天まで届いたようです。天雅彦の命が消えました。

下照姫は天雅彦の死をいたみ、しばらくは打ちひしがれていましたが、周りの人が心配しているのに気づき、いつまでも悲しんではいけなさと取りました。やがて、

少しずつ自分を取り戻し、苦しんでいる人にはやさしいことばを、希望をなくしている人には励ましのことばを与えらるほどになりました。

後世、里人は感謝をこめて下照姫をまつるようになり、夫の天雅彦も一緒にまつることにしたということです。

社号石

延喜式の神名帳※に出てくる神社を式内社と言います。高売布神社は、三田で唯一の式内社なのです。

摂津源氏の祖・源満仲が、川西の多田を根拠地に多田荘を治めることになりました。地元の豪族を従え、領内をまとめていったのです。高平の里もその支配下に入りました。

満仲は、高売布神社を莊園北部の鎮守としました。五十株の槻の木(けやき)を植えさせました。「五十槻」を「いつき」と読み、「いつきの宮」と呼ばれるようになりました。拝殿の社号額に「荷月大明神」とありますが、「いつきだ いみょうじん」と読むようです。

八代將軍徳川吉宗のころ、祭神が同じなのに、神社の名前が違ふところが多くありました。神社の名前が祭神と合っているか調べて正しい名前に戻そうと、儒学者で有名

な並川誠所が幕府の支援を受けて調査をしました。摂津の国の二十社について社名を調べ上げ、

「正しい神社名が分かったので、その名前を刻んだ社号石を取りに来るようになり」

と、大坂の奉行所からそれぞれの各神社にお達しがありました。

高売布神社では、屈強な男を二人連れて、大坂に向き出しました。

「以後、神社名を守るように」

と申し渡され、社号石をいただいて、持って帰ることにしました。石には「高売布社」とあります。

遠い道のりを交代で背負って、ようやく高平にたどり着いたのです。台座を作って、その上にすえつけました。

この時同じように建立された社号石二十基は、現在もそれぞれの神社に伝えられています。



※延喜式・神名帳：延喜五年(九〇五)から編さんがはじまつた儀式や祭事についてまとめられた書物。その中で諸国の神名を記したものを神名帳という。